

～企業コミュニケーションの価値を多面的に高める「場」～

日本には企業博物館が全国に1000はあるとみられています。企業博物館を立ち上げ自ら館長を務めた栗津重光さんが、全国200か所近くの企業博物館の訪問で見出したコミュニケーション価値を、あますところなく伝えます。

ミットヨ測定博物館

〒213-8533

川崎市高津区坂戸 1-20-1 株式会社ミットヨ敷地内

<https://www.mitutoyo.co.jp/exhibitions-and-events/museum/>

電話番号 044-813-8204 (直通)

入館料：無料

開館時間：10:00～17:00 (入館 16:00 まで。完全予約制)

休館日：土・日・祝日及び会社休業日

【施設の概要】

ミットヨ測定博物館は精密測定機器に特化し、その進化の歴史を示した専門博物館。「沼田記念館」と「測定機器館」で構成されている。沼田記念館ではミットヨ創業（1934年）以来のあゆみと、産業の発展を支えた測定機器の進化の歴史を、測定機器館では世界各地からの資料を元に、測定機器のルーツを知ることが出来る。同館の収蔵物は経産省の近代化産業遺産群に認定されている。

【沼田記念館】

ミットヨの歩みを時代に沿って全8章で紹介。

創業者・沼田恵範（ぬまたえはん）は1897年、広島県の浄土真宗の寺に三男として誕生した。京都の旧制平安中学校を卒業後、本山である西本願寺からアメリカ開教使補として渡米。カリフォルニア大学バークレー校で修士課程を修了し、1930年帰国。新設間もない内閣資源局の統計官となるが、仏教を世に広めたいとの思いは強く、その資金を得るべく事業を興すことを決断した。

1934年マイクロメーターの国産化を図るために研究所を開設し、1936年に三豊製作所を創立（第2章）。1963年にはアメリカに販売会社「MTI」を設立し、またこの頃、生産技術の拡充を図り、機器の高精度化と増産を実現した（第4章）。この後、同社は飛躍的に発展（第5章）し、

グローバルネットワークも確立（第6章）した。1996年からはさらなる測定の高精度・高機能化に対応している（第7章）。また、1965年に沼田が設立した仏教伝道協会は、日本のみならず、海外10拠点で、「仏教聖典」の頒布活動を推進するなど、仏教の普及という沼田の「夢の実現」についての展示もある（第8章）。

【測定機器館】

世界から集められた計測関係の機器や資料の8つのコレクション

かつて「メートル」という長さの定義は地球の子午線の長さを基準に割り出された。具体的な長さの基準器であるメートル原器は1888年に30本造られ、日本へはNo.22が配布された。Collection1ではこのレプリカが展示されている。マイクロメーターやノギスといった、長さを測る各種の測長器（Collection2）、光の性質を利用した光学測定機器（Collection3）など、厳密な測定を行う機器が展示されているが、圧巻はCollection5の須賀コレクション。MTI（現米国ミットヨ）の副社長を務めた須賀信夫は世界中の測定工具の収集と考察を行い、社員のみならず顧客への教育にも活かされた。収集された膨大な測定工具はミットヨに寄贈された。その他には現代機械工業に不可欠な三次元測定機（Collection6）や、多様化する機械部品の測定や評価に対応する形状測定機器（Collection7）が展示されている。

【展示物】

博物館全体が膨大な量の実物展示で構成されている。蒲田工場は第二次大戦の空襲で全焼し大きな被害を受けたが、その前に、機器類はすべて宇都宮工場へ移送していたとのこと。その



1952年当時世界最大の3m外側マイクロメーター。測定範囲：2,800mm～3,000mm 目量：0.01mm
(筆者撮影)

ため戦前からの機器類がすべて残っていて、同館に展示されている。表に出ている展示物も多いが、さらにその2.5倍（約2,500点）の数がストックヤードに保管されている。

【栗津の視点＝見どころ】

創業者の沼田恵範は「日本で誰もやっていない仕事をやろう。それならば誰にも迷惑をかけず、国家・社会の役に立つことが出来る」と考えた。検討の末、まだ国産化されていなかったマイクロメーターの開発を決意した。開発担当者に沼田は「ヨハンソンと同じものを作るまでは、一切の改良改善も許さない」と厳命した。最初に作られた100本のマイクロメーターのうち、当時、世界最高水準と言われたスウェーデン・ヨハンソン社の基準を越える検査に合格した17本のみ市場に出すことにし、残りの83本は従業員一同で蒲田工場の床下に埋めたという。

この話を聞いて、本連載3回目のニッスイを思い出した。アントレプレナーの国司浩助はト

ロール船の開発に際し、英国で船を造らせ、船長も雇った上で帰国した。その最高の品質の船舶を徹底的に研究して、国産化に取り組んだのである。いきなりに国産化を手掛けるのではなく、世界最高品質のものを導入してから国産化のステップを踏む、という点に、二社の共通性を感じた。

マイクロメーター17本が完成した時点で沼田は、国内の機器メーカーの経営者、工場長に案内状を発信した。内容は檄文である。三豊の使命、提供する製品の品質、日本国の発展にとって無くてはならぬものが完成したと述べる。これも連載の5回目で、島津製作所の経営者島津源蔵が書いたレントゲン完成時の口上書を彷彿とさせた。経営者は何をなすべきか。経営者としての矜持とは何かである。

優れた経営者には共通性があるのだという事が、200か所近くの企業博物館の逍遙を通して見えてくるように思えた。